常照
第859号

生死するいのち　失いざかり

折笠美秋さんの『死出の衣は』で、「失いざかり」という言葉を教えてもらいました。次々と、知人の訃報がつづく悲しみのなかで、それを「失いざかり」と表現しておられるのです。折笠さんの造語なのか、折笠さん自身が何かで読み、心に刻んでおられた言葉なのかわからないのですが、いずれにしろ、このところ私自身が、身にうずく実感として、この「失いざかり」という言葉に向きあわされています。

あの人もとうとう亡くなったか、ああこの人までもかと、相次ぐ訃報に呆然とし、やがてこの「失いざかり」という言葉をいつの間にか口にしているということがたびたびあるのです。お互い、そういう歳になったのだなと、あらためて思い知らされ、そしてそのたびに、自分も早く死にたいなどとは思わないけれど、同時に、友だちや親しい人びとに皆先だたれて、一人とりのこされるのは嫌だなということも、かなり切実に思うことがあります。

あるカレンダーに、こういう言葉がありました。

生きたくても死なねばならぬ。
死にたくても生きねばならぬ。
ひとときひとときが生と死の
くりかえしである。
生死（しょうじ）を忘れるとき
生活は浮き、生死におびえる
とき生活は沈み、生死を
凝視（みつめ）るとき、
生活は一期一会に輝く。

ふりかえってみますと、たしかに、自分の生死を忘れて、ただそのときその場の面白さ楽しさを求めて、浮いた生活に我を忘れ、一転、自分自身の生死に直面させられると、死の予感・恐怖におびえ、たちまちに生活は沈みこんでしまうのです。なかなか生死を凝視るなどということは、できないものです。

ただしかし、人間は、生死を凝視るということはできないのですが、しかもなお、意識しているかどうかは別として、自分がいつか必ず死ぬべきものであることを、命の事実として知っているということがあるようです。だからこそ、なにか生死の事実にふれさせられるような事柄や、その事実をえぐりおこし、言いあてている言葉に出遇（であ）うと、思わず立ちすくむということがおこるのでしょう。生死の事実？そんなこと私には無関係だとすましておれないことを、この身がちゃんと知っているということがあるのでしょう。

たとえば、俳優の緒方拳さんは『恋慕渇仰』という書物のなかで、次のような体験を書きとめておら

れます。

中国の古い言葉で、「今日感会　今日臨終」というのがある。今回会って、お互いとても良かった。その気持を大切にしよう。でも、今日会うことが、この世で会う最後かもしれない。そんな意味の言葉か。「一期一会」という言葉の意味に近いが、もう少し厳しい、殴られるような感じの言葉だ。

「一期一会」という言葉は、まさしく、この世の道理、この世の事実というものを言いあらわしている言葉です。それに対して、「今日感会今日臨終」という言葉は、「今日」を生きている身において、ふかい痛みをもってうなずかれ、聞きとられた言葉だと思います。「臨終」の自覚は、そのまま、今生きて在ることの希有（けう）さを思い知った者の言葉なのであります。そのことを、緒方さんは、「殴られるような感じ」と表現しておられるのでしょう。

「今日感会　今日臨終」という言葉を目にしたとき、「殴られるような感じ」を受けるのは、その言葉によって、忘れてしまっていた命の事実にひきもどされた思いがしたからでしょう。身はいつも、ちゃんとその事実を生きているのに、意識はそこから眼をそらし、気晴らしをし、我を忘れて走りまわっ

ていた。その私が身の事実の前にひきすえられたということなのでしょう。

人間誰でも、死ぬことは嫌なことです。不安であり、恐ろしいのです。だから、日ごろ私たちは、自分の死から目をそちし、気晴らしに明け暮れするのです。しかし、私たちがかならず「死すべきもの」として生きているのであってみれば、その事実から目をそらしているかぎり、私たちの生活はどこかにごまかしの色をおびてくるのです。厳然（げんぜん）たる身の事実であるのに、恐ろしい、見たくないと目をそらしているかぎり、私たちの生活が堂々としてこないのは当然なのでしょう。

どうぞ共に合掌お念佛申しましょう。

八月の常例布教（ご法話）のご案内

○前　期　八月七日（木）～十一日（月）
奈良教区 宇陀北組 萬行寺
講師　沓名奈都子　師

○後　期　八月十三日（水）～十六日（土）
兵庫教区 播磨中組 光専寺
講師　藤本智彰　師

○場　所　小樽別院内

○時　間　午後二時（法要終了後）～
午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院ください。席の間隔を保ち、換気実施の上、お待ちしております。

発行所
〒047-0017
小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院
電話（〇一三四）二二一一〇七四四番
FAX　二九一四〇八〇番
テレホン法話　二七一一六一六番